鷹口傳書

五

ヲ多10
552
5

鷹口傳思出次第注付之

一シホトヽ鷹トアカ鷹トハ別也シホハクロフナリ アカ鷹ハランシノケヒタテニ一文字ナルフアリト云〳〵ランシレトハ尾ノ下ニ白クアルモナリシホハツメノウラニシノキタヽスシテヒラカルヘシトヽ〳〵又云シラアカト云鷹モアル歟 詩學大成 鷹部ニ入ル但白赤トヽ云ハスヽノ別ニ入ル ヽ引

勘者之

一鷹ヲツナクニ二ツ同架ニツナク時先我鷹ヲツナキテ後ニ貴人ノ鷹ヲツナクヌトル時ハ先貴人ノ鷹ヲトリテ後ニ我鷹ヲトルヤタカヲ乱ハセシタメナリ

一神ニ奪ヲ生ル時大緒ヲ例式ツナギテワナヘニスチナカラ入テ一スヂツヽ奪ヘ引ハリテ架ノワキヘツナキトヽムルナリ

一シロヲツナク極一段秘スル事ナリ白ハ大鷲兄鷲鶴ニアリワニコ鷲ナトニハ其沙汰ナシ日本ノタカニテハナシ白ハ何モカウライヨリ渡リタル鷹之個シロキ取アリテシロノヤウナル鷹アル変モアルヘシソレハフガヽリ之フガヽリノ変ハ

日本ノ鷹ニモアルヘキヽシロハシロドコロ七ケ
所アリ是シロヲシルヘキ口傳ヽ一同ノ
色ニツヽ〳〵トメ為年ノ巣鷹ノ影剣
ナトリ付ノ板ニアルヘシ一ランヒトテハナ
ノ毛白シ一毛ニモシロクフカリシヲカケタ
ルヤウニアルヘシ一ハシトツメトアメ牛ノ
ツノヽ板アルヘシ一羽節シロアルヘシ一
アシウヅラノアシノゴトヽガンギゴニカニテ
シロクウツクシキヽ一羽ウラ子リギヌノ
ゴトクフモナクテキラ〳〵トシテ白シイカ
ニモニユシロヽ此七ケ所白ノ見所ノ口傳ヽ
シロノ巣鷹云ルアルヘカラス
例式ツナク板ニシテワナヘ一スヂヲ入テ
カタワナニ一スヂ中ニテ結トヽムケテ一スヂ
ヲハソモワナニ入テ一スヂヲソノヽサヂ
テカタワナニムスビテヲクヘシ大ナル秘伝

ヘ細々ツナクヘカラサル事ナリ大緒ハ白
クスルナリ又紫ナトニモスルヘアシヲ皮ヲ
モ白ナメシノイカニモ〳〵皮心ノヨキヲスル者
ナリ
一旅ナトニテ日タカクシテヤカテ可立時ハツナ
キ板例式ニハカハルヘシツヲノ板ニツナキワ
ナニ入テ引トヲシムスビトメスシテヲクナリト
ニル金ナラハ例式ノコトクムスヒトメテツナ

クヘキ〳〵又云無ヲ奪ヲツナク時大結ヲ
ムスヒトヾメスツナクニ故實アリ自然此
事ノ時奪ヲハナスヲアリ其時架ニタ
カヲツナク時大結ヲムスヒトヾメス其ハワナ
ヘ入スシテ大結ヲツノヽヲヒヲ時ノ板裏
別尤ニ注ス
一凶ヲノ時ハナス奪ヲ調板ノヲ先架ヲ
サウ所ノ側ヽ結ホヱノ本ヲツヲノハ奪

ノ右ニナルコトク結テ此所ハホロノ本ヲ
ノ尾ヘ結ヒ餌袋ニクチ千エヲサシス紙ニテ
鳥ノカタチ切テ入ルヒロキ大結ニテ二ヶ
中コトクワサヘトヲサズシテ ツナキテヲク
鷺ノタナサキノ鈴付尾ヲ一枚ニフノ
コシテキルナリ其所大ヲモヒキテ出ルナリ
ソノ犬ノ尾ノサキヲ一文字ニ切リ只ノ
所犬ノ尾サキヲソロヘハ言クハサムヒサテ

鷺ノ足ヲハ切テハナスナリ大ナル祕伝
キト人ニ相傳アルヘカラサルヲシ
一鳴ヲニットルヲアリ坂東ニハコレヲワワコ
トリ云ヒトヲ〳〵尤鷺函ヲシクワセ
祕伝ヒ一ノ屠ノクワセ右ノ方ニ餌ヲ
合スレハ一ニナル心ヒサレハ右ニクワセアル
トテ雛スヘカラス伝ヲモ聊ニ人ヲワ
ラフヘカラス

不吉ニ鷺ノ尾切リ

ノ右ニナルコトク結ヲ此ハホロノ本本鶯
ノ尤ヘ結之餌袋ニクチ千エヲサシス紙ニテ
鳥ノカタヲ切テ入ル之シロキ大結ニテ二ヘニ
中ユトクワサヘトヲサズシテ ツナキテヲク
鶯ノタナサキノ鈴角尾ヲ一枚ニフノ
コシテキルナリ其ハ大ヨモヒキテ出ルナリ
ソノ犬ノ尾ノサキヲ一文字ニ切リ只ノ
ハ犬ノ尾サキヲソロヘハ一ロクハサムヘサテ

鶯ノ足ヲヘ切テハナスナリ大ナル祕変
キト人ニ相傳アルヘカラサルヲヘ
一鳴ヲニツトルヲアリ坂東ニハコレヲワワコ
トリ云ヒヲトヲヘ尤鶯ハヲヘクワセ
祕変ヘ一ノ屋ノクワセ右ノ方ニ餌ヲ
合スレハ一ニナル心之サレハ右ニクワセアル
トテ雛スヘカラス伝ヲモ聊公ニ人ヲワ
ラフヘカラス

一千鳥ノクワセ秘変之尤ノ羽ウラ一二ノ
羽ブシノ所ヲカウ春ノキシノメン鳥ノク
ワセノコトクスルヽ又トリ飼ヲヨハ仙モ
ムヽヲ飼ヘキヽ

一鴫ノクワセ是モ秘変之ウケガイノシタヲ
カウナリトリカハヽムヽヲ飼ヘキナリシギヲ
ハサムハカキノ番ヲ西方ニアテヽハサムナリ
カキノ番ヲアテスシテハサモ不若ル

一雉ノメン鳥ヲトル時ニ先ヲ飼ノ飼板アリ云ル
ノサキヲ飼ヤウ子ノアル所ハアフヲ見故ナリ
又云鳳ヲ孔飼ハ云ルヲカウヲナシ但
カウ説モアリ尚カ孔ノ説ニハ云ルヲアケスシ
テ尤ノワキヘヨセテタカクカウシヲ入ル程
ニ云ルクワチヘウツクシク飼ナリタヽクハ孔飼ス
崔一ツ半ホト飼ヘ七日ヤスメテツカフヤウ
タヽカケス又云雉ノ鶉クワセノ事ヲ

一千鳥ノクワセ秘方ニ尤ノ羽ウラ一二ノ羽ブシノ取ヲカウ春ノキシノメン鳥ノクワセノコトクスルニ又トリ飼ヲナラハイノモムヲヲ飼ヘキニ

一鴫ノクワセ是モ秘方ニウケガイノシタヲカウナリトリカハムヲヲ飼ヘキナリシギヲハサムハカキノ番ヲ取方ニアテハサムナリカキノ番ヲアテスシテハサモ不若ニ

一雉ノメン鳥ヲトル時ニ尤ヲ飼アノ飼様アリ云ノサキヲ飼ヤウスチノアル所ハアフラ見故ナリ又云鳳ヲ孔飼ハ云ルヲカウヲナシ但カウ説モアリ尚京ノ説ニハ云ルヲアケスシテ尤ノワキヘヨセテタカクカウシヲ入ル程ニ云ルクワチヘウツクシク飼ナリタメクハ孔飼ス崔一ツ寸ホト飼ニ七日ヤスメテ用フヤタヲカケス又云雉ノ鶏クワセノヲ魚ヲ

九ヲカスメ羽フレヲ切鋸ナリ尤ノ羽節
ウラ一二ノ骨ノアヒヲカウナリ
一元鋸又鷲ヲ人ニ渡スト云ヒ大猪ノ一ツゲ
人ノ方ヘワタシテ金一筋ノカタクノ猪ノ
例式上中下ノ人ノ品ヲ見悟シテワタス
ヘキナリ惣而人ニ鷲ヲ渡スル世ニ何カト
云ル別ナルヲナシ三指礼ト云ル大切ノ
秘事ノ是又別ニ口伝ヲ

一フセテカヒニ入ルモアリ鷲ヲハ茂ニテカゴ
ノナカライフヨリ合テ結トヽムルノ茂ニ
大結ヲムスヒワクル共ムスヒ
茂ヲ器シテ杖ヲナカニモツヤウニヨニ結
ヒソノフエニアシレ結ヲ結ワクルナリ
一鷲ノ序鶴ナトヲ人ノ方ヘ出トテ一筆
トハカヽス是ハ二トハツヽケテトラセヌ也自
然人ノ方ヨリシテハ一ツトカクトモ一ツ結ムトハ

カクヘカラサルヿ

一シヽノタカキタカヲ人ノ耳ヲシテ明日招ギ
ハヲ見ベキト中夜又アシタハ鮮砂ナハスワカ
ウ夜 治定セハ今日鮮ヲ多ク釣ナリ
カヒロウ大サル秘夜ナリ又ルキ湯ニテ
二ヒ夜洗テヨクシタメテセウベンノイヒ
ヤウヲタキノ水ト云ソノセウヘニサツケテ
サテシタメテ又イヒシトヲカケテアタヘ

カナルヲ飼ヘシ少ハカトレナリ名養ノ秘
説大ヿ

一鶏ノ雛ヲ孔ヲアリクワセ大キサル秘
夜ナリキジノ尤ノモヽノツケギハノ過
ヨリ下ヘタトヘハヘツソクナリソノヲモテ
ヨリソトノカタノワキヘトリカワヘキナリ

山弦ヲハカケヌ物ヘ毒ヒ蛇ベキナリ孔
ノ人ニあらぬ仕ヿ包丁ちんナトモ式クワ

セラレリタカルるゝ

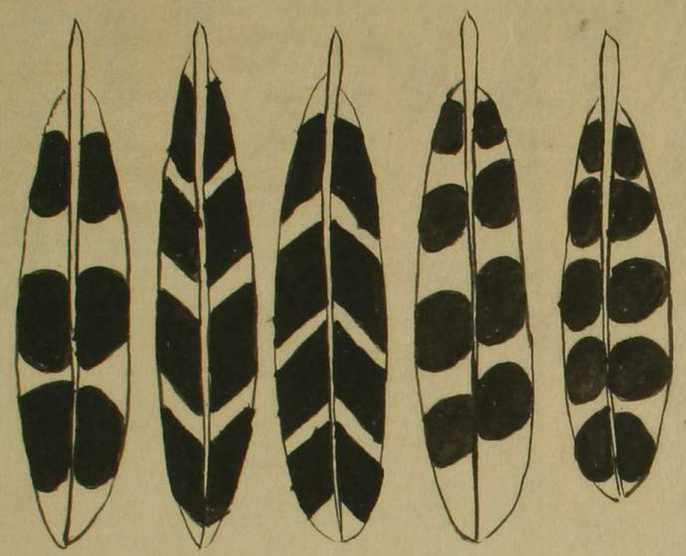
一雉ノヘウナト云テハ月九月ノ間ニ大雪
ニトラスルるアリソノクワセラモ鶏ノ名也
ノゴトク飼其名ヲハ小鳥カイト名付リ
ソレモ鶏トリタマハ山法ヲカケテシキナリ
何モ秘ゝ以小弓カイハシル人モアれへキゝ
一白ノ兄弟大弟ノクワセ是モ秘るゝ
ノ上ノ秘伝鶏花ヤクワセヲカワヲシヘ

カウヘシトリカワホト例式元飼様ヤカワ
ヲシヘカウるレロニカキれるゝナヲロ仕多
るゝ

一白ノ肉毛雪白ト云モアリソレハ也白鷺
ノエトクゝ又青白ト云ハセナカナドモゴイ
鷺ノ様ナリ只白ハ前ニ記ゴトク七様
カハリテ大ニイシロナれへシ是モ仕ゝ屈
るれるゝ

一鶯ヲ呼ぶ大鶯ニカハルナリ人ニ
レヲレラス大タカハ三ニ三ニ鶯ハ二声ナリ
ユユ口伝アルヲナリワカと人ノヨクニニれ
遠えん

一鷄ノヲキユユカスハナシエモヲ用ヲリ口伝
三ヲナクハ心ヒラレカタキヲ



まちうら尾
せまち尾
風うら尾
志ぶち尾
志ぶと尾

夫鷹ハ仏法ともに摩訶陀国より宗上元年
こゝに渡の年十一月三日当時に筆んせんと申ふ山に始
まりたいせん堂と申寺まく長水と云人
古より此鷹をかきてそれ是のまき何けの咾
ゆく鏡をとつ筆く村より それよりれいはいたせそれ
くさ八千八百余歳也

一鷹の名ハ
もろこし国にてハ　すゑうと云
しんらん国にてハ　らんてうと云
ひやくさい国にてハ　らんと云
我朝にてハ　忠りと云

日本国ゆらくハ　書かく云

一しんしんの国史人ハわりなき紀をかいさりといふ事を
十五代のりこみちかまへりしわんせいを人ゐはゝ人
書宣旨紙給はしてはゞかりて、まうさ国ゆく
せいしいかなるしん国の王様なとこのまもりるやその
時法皇に尾まひを法ずくはうをさゆして居り
めしいかるとみるにかの様か丹吏人まいりてやくし
この法様は病ハゆんひやうけんを十上はたんちた
しなむるとしるなるハ法様のいのちをたもちけし法たま
ふ宣旨ちすなる吏人かしこまりてあつまりかりしき紙を
たりいるゝめして、しちんしかりは法様のなしなとれ紀を

も入あり候れハひとつよりもすこしもかいさ紀よく尺之
書りきれハ法かと太中法よろこひありてすなはち法旅を
きさい国とよひてかのくまへりれわんせいをとる吏人
こゝろて中宮れ様の皇帝ハ万衆薬乃に法すを
しる紙むりしよりいまにいてまうく人これをはやす三
といふのてらわんとしてちのくちやうと云ひきらく紀ゐ
よらく位へりれせんさといへるあいしやちあり

一九宛れあらひのかそせんさんのとうさのまねとのら人
のたてこれをとりて様みせまんきやうと治せる薬を付
前ハ長生の月をる不老不死の薬とうつけ候
せんさんのふりとゆくハ位をハかりせん上薬をいせん去あり

のたまはくうちふのあきむ未代あく世よいてるまて詠るを
このむ人世業のわんせいとあるをきてつてよつきのを
一業の名所事
まん分の清水といぬのをよあく嘉あり
ふきこの井は高こと　いふしのすのちあり
せきやこしこのあるを　あるをしなをりあり
やちこ原　まつちとあり
せこしこんせん
ふかしこのさいのあ　あろきはきりあり
志のふさるのあ　いんやこしのふのとい
ちふさきのあ　四ようあるしはなをその上ゆいるさしのれ

きりはなのあ
ふこ海きのあ
こはちこ
ねんこのあ
さ金こはあ
いきしさ
ちちんさ
ちちんさり
めい業の事
このふこのさいをんのかよんそ
まつちと　あゝみす

あいきりしんひのあはあ
竹のとはあはこ川
ふちはんのきこと
なゝみのあ
あるをしをりあり
よるきあり
ひしちのこ
ありてしさ

なゝむしの称
かんところ

大せり　あったきの称　　あらたきに おいるたけ
あいす　かしも　　くいのま
やくざくさ　ちろい物　させんしゅ　からむしの称
すこまつさ　はくこれ　右のはをいて
かきこあり　ちとりのつを　ふあを
ちろのくさをのを　あまこり　むさひ
一山椒を二筋あるてハこををてくり　但のちはようひあり
つきハすを〳〵　むまのこをき　雪をてふきて
とをこうはをく　雪〳〵　六日こうを過て七日といをん日
とりこいてをのちみ十日こうら過へ
一三尾雪を五日こうらくけて六日といをん日あいを

一雪れめい雪〳〵　　雪のかさ乃こう
ちこをを西　ようこうさのこう　ちの
なつれ　こをつこれきを　かんところ
右これ〳〵をありはをんは　ちをさいて　こう　ふんて　こう
あをを　せんてまつ〳〵　てこう雪〳〵　ふをこりあり
らんは　一葉をもち申〳〵　但ようしくい　口伝あり
一くつなり　せんと申葉　ひとろふをこり
かをて　ちこれをの称　まつちとようきのこふ
はくこれ右のはを　たうこんせん
右のくをこり　雪のいのちなりくまをひせをこりてちくい
ありてこうちすきてこつよなつ　耳　葉をくつをる

せこれをせんてゐるよゐやくゐ屋にて利乃
あるいハくすりてんまあり此くすりをとハたゐまてゐ今せんと
あるく日かすてい人こまてゐことをゐ〳〵すよ〳〵かゝせ
一書ゐよ百日ゐりをゐらせねくすりをきりくさいのあゐ〳〵
たぬきのあゐ〳〵すからすれさもあるをせ〳〵かゐ
これをゐをすゐ茶きたゐりはゐうまてゐさハのいし
かゝゐみ日ゐもあゐ〳〵ねゐまゐすけの祈
あゐをゐをこれをこ屋かゐりまゐ川して屋ゐつゐてかゐ
三日のゐちゐあをゐありみゐ云日ゐもあゐ〳〵ねゐ屋ゐすけ
ゐきなゐ〳〵すのゐかゐれいろこゐハにゐ〳〵をい木
ゐ茶のゐりあゐ〳〵ねたゐしゐ右これをまゐてゐれて

かゐ屋〳〵ゐてんゐあり
一書乃ゐんさゐれ事
せんゐゐてゐ〳〵ゐゐゐ光ゐよゐみゐりゐゐをゐそはゐい
白光月あゐ〳〵ゐんさんゐれけハ ゐゐくゐゐ
ゐいゐゐ大ゐゐいゐのゐくいゐゐ〳〵きゐハゐんせいゐゐ〳〵
ゐゐりちゐ屋をいけようゐ流よハ三さゐあちて屋ゐのこと
かゐハ こゐゐ〳〵をゐ〳〵ゐゐこゐ
なりまゐけハ ゐゐこのたゐへのこと
せ〇せんハすをゐ屋ゐんハいゐをみゐまはゐきは
ゐそのさきれゐ
ゐきれゐハゐ〳〵ゐてゐんさゐハこゐりをゐあき

[illegible]

一ゑんよ　二月さうあり

いのちらうきさゝ　かのけんらうてかはりすゝ

ゆとをさかをたてたびたわちいきてわいわゝきりゝ

わゝてはようてんきひゝ　このきゝはなゝきゝの[illegible]

一ゑのちゝきさゝゝは[illegible]をくしてゆわゝ　けゝてく

をひゝゝ　大よありあゝ　[illegible]

わゝさゝゝのゝこゝをとゝゝ[illegible]

日のゝとゝきゝゝをゝゝすゝゝして[illegible]をこのまん[illegible]

のゝゝをつゝゝ[illegible]いのちなゝけをもゝ[illegible]

つゝゝゝゝん

一ゑゝゝをゝいゝふ一所ゝゝ二ゑ大をゝゝゝ[illegible]

みゝゝよゝくゝのあゝもあゝ[illegible]

ゝをあけよゝゝ[illegible]ゝゝよゝゝゝす

りゝゝゝひぬをゝはゝゝまゝゝゝゝゝをゝゝゝ

一ゝゝゝを七月ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

まゝゝゝゝゝゝゆゝすれのゝゝよゝ竹のゝゝこゝを

かゝゝゝゝゆゝみゝゝこれゝゝすゝよ　一日一夜を[illegible]

ほうよもよすゆきん志さいろしけしめてかりなき
業のうさんちり志まつしてかなたこまことに山を手まき
とりくんみ百西来の本をそて志かをやきて大かな
まあかふ行んをて三まつり恋めりしすきたり いち
米の志るをだ仲よ志めくかりの中をり恋つきよ系
母本をまあ狂てしてり恋りしすきたら八恋しくあく壮を
まきそてり恋紙この業よなりりすい志ろ業をみちんいり
り恋りしすき為らなさくらのうちよあり緑をお脇くあらせ
てり恋りしそまですをもり為いすれ為りりいのたれの小中い
のちを志あく恋よ志めくか恋か為つりすい中さをを
方すの本すりそ一本り恋すき為らハ志ろ中をて恋

こまことん人の志ろきらえよくくかくせ
みあつきとかりすのえにあるせそ志みしてろの中
恋を志あくか恋こまことハすきさ為まことも為らしなす
みなのさおんのうとムなをうけ所しよして百まち
すきさるを七子のおんかてとおのまみ此つめをとりく
中んしてあるせ業して恋よつてこそか恋みいえく
かくらや乃こ志ありせんしむ由乃しらされまうる
こそけしくかのく三志也をかりゆくしてか為乃
すきあらハ志田のころよあつねとあるせくり恋
みこまとも かなみすハ志のさハの水を目のを也ま
うらゆもり恋甚つろ山ぞりとこの本るさ乃よ んき

ちりとゆへくよくもんぜんも無ハかり逸うしす　同
茶とうくるもあを色せうしまうて摩志めて
一忘とふう事大かたすのさえたんひのかよんとまんすて
とらりうな一分ハかりうつしいれすきゑらは
あつ袮を山入りまさゆをうゑかりの久くちりと
ことをうて山入りまきは二夜とりしてす々よを唐
袮の時まくすゑよみつの時よりすゑてむまの時よ摩よ
みをとふきてそこかこよけのひろかとつきけよきくをりを
久てくその中めきりよるとうさいの水をゑみ七日あし安
きう茶をかいて志のうさいの水を同りぬりて九えむ
ねけさそさるの女文あさすへしよく人よかくせ出ぬ

志らをを色りしす
一正月りそもこうきょうたくちう耳へ入り菜の事
日てほくの間こすゆんあり袮こ遣と合くれんくり此
れのむかきさの志てみますせてゑくちゑくちハ時遣
み云ごりとうけれし　百日してよくすりて袮まえの
ちとみと知のちをあをもて久のんのれしとり此はなく
ぬりてかゑ二くなふかつりきうらく
一きうなくつの筆ぬ摩ふハうハを志節りれん乃きぬり
つらて志らを志新りいてしくすゆ此うらり乃し
まうい志の分とまてあういくゑ云所りき摩ふハ
山室もの志り紙ふつみ久ゑ志をしう

一つ稲よまの方へ行くよい方のねさきに有るみねをたいら
やきてみたれば き有るよい方乃よ国を見うり出
まを有の元へ水ゝ色〳〵みたせうは出むはの乃
よあとゝ〳〵色〳〵たよハあむまの乃よあとゝ水色〳〵
又たれ〳〵けるの乃きをこそけて水色よく〳〵出す也
一ゝうりは水くかゝを某の事
こをつのことをわ〳〵の乃ゝいをたゝあきてゝうゝ参人
水色〳〵すれハ出ねゝそのうゝよよあゝ行る金を金へ
一ゝうりを屋ゝ出せてよくつゝうゝ茶
むゝ〳〵りあゝとりをあゝ屋てつゝ乃ゝ色人ゝ出
らすゝ出〳〵ゝうゝ

一ゝ屋有ゝと六日四よ金年ゝ屋のゝうゝりゝ有る
よあゝうんゝとゝ乃ゝとこゝゝうゝ有きて有かくしゝ
てかゝゝそのあ〳〵色ゝいゝとかくゝ色ゝ有ハ百二三
成水をあゝ屋よ百ゝ有〳〵ゝきゝ屋〳〵くを
日中よかくかゝそのタハいのこゝちの稲〳〵すハ
えまゝゝこれこゝ屋をかくゝ色六日よ有三成
有すゝ色〳〵ゝるゝさハの水ゝいくひつ〳〵乃ゝ
行ゝをよ
一すゝゝをゝゝゝゝ有ゝハゝ有ゝよ有ゝ屋
ゝ寸ゝ有ひゝをゝひくゝゝ有ゝ有のゆゝあ有ゝよゝ
日のねゝゝゝいゝゝのこゝゝ有んゝゝゝゝこゝゝ色四

日比ひつじの時あらためよ十日の所をためし あひの紙
にてとらへ置べし
一ねぎをとりへしある所南北又あるまする事
くみしとをあてゝ人のなき所に三所ばかりするなり
と婦りすつるのちかまりとらいて一町斗田は
二三をなしを九二九二ゑまをほかいはするを乱
なつくの本あらたてたかんつくりきすかいち志紙ふり
すへきのゝち志苗田のゆゑあかり種を合なくうらゝく
二附ありて苗まり紙へきて一町すきぬまはれふ
るひてとえくをなそ一をつゝてとくなるにたるえ
一山なりの苗あらえてつかまぬるなるきん种申

まきつけてゆくこの苗のつれ右にまきつけてとくとるなよ
あらたて夜なかは本ありての水によろしくして秋ならは
いその名此露によろしくて九なりはよくくうらいして婦
ゆゑにとかりて一日てりて其のすゑにつゝあかりて二きまふ
ゑをさてあひひのさねを三ツよりつうし つゝはん
日ハ三日一とこれをうゑ鶴いのちおさくよくつりきゑ
葉の色をハうゝちんと奈つてゆかくへまちてすなひくえ
一鶴よつひをとよふ中ひを聞くつしなうまんど〇を沖
ありよつくてこあひをうハ実てひさりみきりと一束
つて中苗葉ゐりハきいゝ知りたのあ風きてきうなの
あかくよあらたてうゑさてたくさんいろあなくある

このやまいハつゆときいねむもつまる事もあり
たゝみに入まハ中ゆひよする
一霜に大風ふき中ゆひあり候ハゝ紙にてよくよく葉を
かきそてうのゝ急ぎ又桑の霜をとこの葉よりきり候ハ
百姓にて食の虫を急ぎ十日急ハ是ありとも中ゆハ乃
中にハ二三ありすゝゑ一すゝ十日の間食の過り
あつき桑をとりして急に三日てとつくわつへし
十三日の扨かき広き紙にあまりつき虫の扨をぬきよく
あつき桑の事わりを扨ねさするあまに扨くきよりわらく
まゆハちすらし出きんさそけくまをわらくして桑乃
扨ぬきて いまさしるとおく乃扨そちを二三度ほけ

くまり出ハひるハあつく桑をこまかにして
一日三とつこの葉を三日ふ与へし きさきとて紙に
つらく与へしともあらいひとき之
十一扨かきよし 広き紙にあまをうつす
大ゆりの桑ひるによかうやの桑ふちこふ
いとの間にわいる所あいよしの桑かくそ
食乃木のんきりこまをせんしてきりし置く
かつへしともふも入与へし
一おしきの葉よりとるさいのかをつ葉に又云すみまて
つまくしきろい扨桑中にて入れてつくへし
一すりし葉のゝすいのとつち乃桑まつちりくすの扨こ

まをちん〳〵ゑよ志めゝくゐ
一まん病〳〵ゐく北事いきゐ
けゐくあゝいくゐうまをつき志りて色をしめく
ゐ色又云ゝをうちゐるふすゝ
一志〳〵北茶ちゆ〳〵こふりて志ゐ地一きん了こまを
よきすゝ合く祢ゆ〳〵くつく毋しゝさゝ本乃
をいゆをゐ志ゐい地こまをゝふん了あをて雪
めゐら異茶の中よ入く中一日をて水をあふをよ
一雪のあゝたまゐゐをあをす茶乃事
祢こ乃す祢のたまてゐをこゝ毋〻こゝきすて祢し
てつくゝしゝ云ゐゐこの祢たてきてきねよつゝて出よ
すこゝあゝりてつをよ
一ゐをひきゐる茶かゝむゐろ北ゐ祢をこ毋ゐ了
たくゝくつけよ
一あゝをゝ云ゆ毋ひの茶 山ゐりゝひゐあもたゐいきゐき
ゆちこふ呂ゐ〳〵乃ゝをものをゝ志ゐ田あきゐゐうちゆく祢
右こまをいつまをゝくこ毋ゐふして大まあ祢まつて
一日三ゆまゐ了ゝ色みいきゐさの志ゐ祢をつちゆ〳〵く
あゝいくゐゐとゝ左くつきゝ志ゐりゐの志をゝ毋〻
ゐ茶よゆけゐゐをよゆゆ〳〵く人ゝしゐらする
一ん毋た毋の茶ちあゝをまんて見ちん了ゐ祢し
みゐりてその志ゐをゝすゝ入毋ゝみゝゐゝ志ゝ

そくけつりくすてひみあつりくたるりさまも
みこゆるひるをかそくこかつりくさすしみこ
屋敷のこのこゆうちんをかりないまをすきぬ
きハとゆしみこちゆうしをかそくこかつりさきあり
しのをゆうみくくくそまてすくくたるのそこをちり
うをしてこふたるよりまるのをみこうしらの
つきわゆのしくこゆひのうハをつそくこ三ゆ
屋敷をそよるとほとみつるきくゆ屋敷をゆ
一寸のはしりのたるの屋敷菜みハそらく　ハ・ハ
ムうこのうひんつうひのしくハしらハ
よしこまてをまんしよるうさハのみをつり今

一夜いてて仲のたのゆをうりくいまよ神も
ゆまとゆ屋ゆと入ときこそもあてゆ合くて
屋ゆくく乃菜の中てよ人よたすのくく
ひすてみこまのいとりくたろいもひてあて
よきす　たハつハ水　ひきいのあ
右これをとりわをて神りくてきて　ねもし
いくゆるねのムうきのムうさをきりて菜を
よくくさくくく七日ハ入まよとゆく
こまてみすきをうゆ屋ゆ
一きくれりくゆ菜かんとこゆのゆをきす
のますこをムうこのこのこうつ

ときをも五句に つかふしいしなといふこと侍
の様ともに清音にかゝる 又云くさめに入てつゝむ
詞かなハ本をもつゝけるとハ 山路りしもこの詞
みなともさひしくよきかな
一 其のそれしらぬ紙はなるる葉のかす
まさなしをかりて書んとして よまさるゝことかなるかな
さてもの月中のさりかりつさ葉の木あるかなさきかより
のおくふいりして哥とりとハ志侍さまありとりの文
又云志の志けの志てこそ紙かなるに書そかなれハおもいきりをも道
一 おもいきりを手すかなる詞を当座よくなとすへきす
なすかを大なるすき様きりて らちなり 色く 一弁く

ぬるかよく志んまきくるのうちにて いふきとしられけく
かいく一所なかりあつまりて ハ南北り なるとくあるおもり
花の詞 わこすハ ならりけと 心あらくまをたけに
くらつくきかりかして おもかの様を一炊のけなきと
こゝ色てすおほすハりのわさ大きなるにハおもんとり乃
つかふつなのらさとをきこえて わるもく色乃うらしく
をゆ々ひくるのしられて らつし 俳せられ
ハとりのことをも色 葉のしるあり様乃ひさけ
みなくすこし ぬる海もく哥をこ海らにつきりもくひ
色しらくすこしか色さんわつ なにすむに五句もなる
色らすへくとも

一ぞうのたゝ屏すくつるゝくらそりいのこ津ちゆ
ゝすの枝をあるをくうのゆとゝ屏ゝ又云せう
ゆいてゝちの枝けわゝすのを紙うゆ角く
から三日ゝ三度ゝ色入をゝる角ゝ屏はかゝ
屏ゝす

一たゝ屏ゝ家乃ゝ屏ゝすゝ
七月七日むまのはすゝまゝのせゝをせゝ利ゝくゝ屏ゝ
ゝゝてせゝゝのあゝとゝはゝかゝ乃みゝゝりゝき
あゝ屏ゝくゝ色ゝりゝゝを屏ゝ角ゝすハゝをゝゝを
まゝゝゝして水をゝゝゝ色屏いゝゝ紙
ゝゝりのゝゝ紙ゝゝ所乃ゝきゝめを一ゝ屏けゝ云あ

ゝかんゝあをゝゝのけきゝめのまゝゝゝゝ乃ゝ
ゝ紙乃つきゝ紙屏ゝ角ゝ屏ゝ又云ちんをゝ
ゝけくゝあゝ紙乃ゝゝあゝあゝくゝかゝ屏ゝ
一ぞうをゝ屏ゝゝ屏ゝゝいゝゝきのかゝてゝゝ乃
木乃下ゝゝゝ色屏まひつゝゝみ屏ゝあゝあゝ角
ぞうをゝゝゝゝゝ乃ゝゝくゝ色ゝゝいゝゝ乃
ゝ山つゝゝ乃ゝゝゝ屏ゝゝぬきハ一ゝきゝゝゝす角ゝ
一せゝゝ屏ゝゝくゝゝ角のゝゝゝゝゝゝゝゝ
いぬのまつをゝをいゝゝゝゝゝゝゝ乃ゝ色屏
ゝをゝゝくゝゝゝゝゝ乃屏をゝきゝ
けゝゝくゝあゝひてひゝゝめゝくゝのゝ紙七日い

きしくはをみうしらみぬまこのみを石上圓
といふのもりハめんゝてハしゝすれ乃圓の
帝も和の寺ゝひとすよゝゝをくはおこゝ
すゝたをこまをきく給へん一祓んまゝしゝゝ
ゝりく寺ゝしゝしつむこまりよりく手乃
さゝきゝ祓すその玉のまゝをゝてくゝ給やゝ寄る
はゝをゝ乃ゝりくゝゝさまハゝりまをすりあをする年
ゝ乃ゝいんゝりさんハひゝんといをのゝ
てゝ給てり菓ゝ せき寺ゝ
一まんゝの寺ゝまを乃井乃水いんみのあゝまを
ゝくのゝあゝ称乃すゝゝ乃ゝ

こまをあゝをくあつきゝりみまゝあゝ二く
ゝんゝゝしこの菓をハたゝせんをゝ地まハ人
みゝゝをす 岩の中 ゝをゝりゝ水の中乃菓
あり又程中菓こまを一月みをくゝるをハをゝゝ
ゝゝをゝ ゆゝく人みゝ
一寄るみまんひゝゝちゝを云ゝまひあり
すゝハゝゝをゝゝゝゝくゝゝゝ
てゝゝまをこゝて祓をゝ
ゝくゝゝををゝゝこゝり
ゝゝゝすゝくこのをまハをゝ
ゝをゝりあゝ

きしく法みかしらみぬま二この石を石上國
といふ所のほとりにはんかうてかしらすれ乃國の
帝王杣の手うらひとりすゝゝ多くはおこゑお
す又大事こまをとゝて縁へ一神んまうしうかり
よりく志事うしよしつゝむ こま ありよりく悉乃
さるそき紙まその虫のまゝ事へてく中縁中ゝ齊る
はたと物へりくかう事ハうまゝすりあり せす年
所い乃いんありさんハひかんといふとのみ
つゝく縁てり菜を七き志事うて此水
一ましん不の縁金のま乃冰いんみのあらて菓
らくの所あり孫乃すくちゝ此あへいか乃こう

こまとあるなく あつきんかりみゆなゐめく 二く
らんらう一しこの菜とハたうせんとゝて地よハ人
みをてうをす 岩の中 ならりありれの中乃菜
あり又根中菜こまを一みたく多るを八きう
ならいとこえ 中わく人みみんゑ
一齊るみまんひゆうちなと云ゆまひあり
すうさハおるうしまうゆくくちはあきくまさいてし
てあるこまとこ所して根と絲きくたかまりふ
らく氏らいを去うねこりあて本世多まても
ふうゝすへくこの所よいハ去らいてうしといへと
をさうみハ六月一日うかさてまさ多る大きんとあ

ハすてこうけて京の神まく一体ゑこの茶
とういく一時みるとらすハ
一こをていよ御法の事うしらせもはちくらぬる
あ〳〵ハありてをとハ彩をふをくなまぬるゆまて
あ〳〵ひく元のはうこをまくけりすてこて知て
とすゝ以あるとくつ宮よ細いくるりわひち
かれをこをこ行りいてかくなるまうり
うらあるるうみ中海ひのをとりうはの津
きをあくをとひてをくをゑ
一をうけるいつなまひハおい元けくくけくくう
するをとりあハうすのをを屋きくなほとちこ

うけくあるをくめ入くぬるふさきく音
ありてをくをうみ初をけ乃つをあ〳〵〇
のあきらかまくやけをとりあはあ〳〵〇を本
つかのうんまく会をくうをを屋みをうを屋
きををんてをひあるつ一みをくををう
あり
一ををひををを屋まひのをあのををよあるあをを
をりのををよありをををやく一一茅りはあ
なのきををんてをうのををあををつていまく
ひんこをのををあくををををををををををを
をのをちをらひよををををををのをををハ

ゑさといふものありひろさ野りいてて二人して
みのまの乃ゑをあらそのちよ人まさるする
一ちゑをいてすり屋ひの事ひをうひてのちうら
をきてうちやよみ業ぬハいつくを三ケ日うつて
みゆきうそうすよみあつ移とゑみしゑ
さきをすこしさいりくひをうつをすこ
しあるやくちゑのさきうつをこ
一屋ひつきうさう山そうたゆちハいきゑを
ちきゆすたゆちハすてよ
一あつのそきてう業乃事　移このうちゑをひを事
あとひくはうゑみをすきうきすきうきうき

つ屋よそうしてたきし物第八
一雪ゑ事うそく乃事
あしやしゆうそくといふすのちハあゑ乃ゑ
うちハゆさうう又あをちゑめしきをとそんぐ
すゑすゑハゑきちひのまさゑけいとゑさハ
一のつきあくすゑ
一野ゑ馬しゆうそくとハ野うこうちとうち
とりありけのいろハうくひすのすそうきゆ
うちゑの安ハすそあつしさうゑうちの
うをとそうそしうあハはのとき〇てすゑ
いろくれゑひくうすゑうすゆちゑ

なきといふ所ありひろき野ありいて二人して
みのまの条をありしてのちに人にきこしすな
一志をとして寺摩訶の事ひをとらてのちれら
をまてちやよ又葉ゆハいつくを三ケ日うつし
みゆらしそてうすよみあう様を急みし侍
さきをとすまし さしいらくひるようしかとすと
しわらやく志あるのさきたりつきよ
一摩訶ひつきてるき山をとりたゆらハいつきたを
志まいれすんゆらハすてよ
一あしのたまでる葉乃事 様このしらみたハを寺
ゆとほくはく侍し 三云すきすりしたとく

つ守よそうしてたきわ葉ん
一鷺此事そくの事
あとめしゆそくといふハすくもちハあやの御紙
うらハ中高さうし又あをちれめしきとそんぐ
すなしす紙ハなきなひのまさわけいてなきさハ
一のうさとあくす侍し
一野小馬しゆそくといふハ野をりしこをりとふ
とりありけのいろハうくひすのすそしそきせえ
うらうひの家ハすそしあし さとりのうしらの
なきをたきそてしてゆれ流のをなき○そて侍し
いろく た けりひくてりしす侍しすくもちのなう

さハ一寸五分ひろさ一寸ちかきてかねあひのいとまて
ゆふなり
一こしはちまきといふハすゝ紐ハふとさハあつひ
まてをといふハすゝの台のなかさハ一寸八分すゝのもち
ハめしきうをしとさきてハこあゆのうをつなきやうは
ちくらをまくゆふなり
一まんしやちはちまきといふハすゝのおハあらくて
なかさ一寸八分すゝのもちハまんしやくとりをとり
のうちわたをむすくおるゝあるきくいとまきん
てぬいてするなり
一とろさはちまきといふハこしのあはきとはきて

つなきやうハさきけしをちときさらくこしをとす
わちよすると なかさハつ緒のをし 但なん
すのをとハあひるまてあるへし
一うとりはちまきといふハうしとりのゆひつけを
とりてさきのてすわちよすへしすゝの台はひ
ろくのいとまてへきてすへし
なかさハのことゝりゆへくのこんたかへし
こまハ殿上人のつなきやと井あましハ
すへし
一とりの事おんとりさしとちとのちはたなり
とちをりぬきハ墨はやんとりをこんてし

ときて一なり

一ゑんさのぬしきはぬ菓のす
ゑくつの日こまめあゝ孫こゝ
とりむるきのしくみつゝてかん
ゑのふんハきちたるかゝみてこまとゝひ
てゑをあさハやんとりの乃ゆんをつの分をゝち
てみひんをよ　三ケ四ゑ
一ゑきゑいのゝをいゝかひ日ゑのゝをゑんみ
ちめくゝ七日りして入つきの日ゝちとしゝ
りくくあるをゝすん乃ゝこりくゝ孫ゑ
ゝをりあるすゝ

一ゝゝ屋ゝ北事
あちゝいのふゝくをゝゝゝとすゝをゝして
ゝゝちきをハこりしてゑんゝみあゝりてゑ
ゝゝゝみさゝいゝてゝゝちきあちゝひのゑ
くんをハきんしてゑゑ月ちめくゝこまいゝつき
ゝくちめひゝをんゝ人乃つゝ屋ゝゝすある
ゝゝ

一ゝゝゝちたゝ乃ゝゝゝ

こまこうちをとりこうんあ合をてうゑ
一きうの扇屋敷事　とちねうちはいうち
ぬすけ　きすけちうは　ちはてうい　ゆより
一扇の屋の事　あけハ　ちうは
たるさき
一つめ城の事　うちつめうけはめ　とんすゑ
うゑ
一すう菜の事　ほかうくのたうんさこまこ
をこうんあ合くまめ行ようまうあく　こ　ちう
うゑ　ゆうんゆをうゑ　ゆうや　ちうひゆうてうよう
一とうはううる　扇の事

ちうはうあんのちんすくしさうこまをうゑ
あをゑくこうちうゑ
一はるけの事　ちうは　扇を　こうちうゑ
一扇しのすゑ　すぐちうは　こまて　を合せて
ちうまつうてんゑのうさを　ちうくい　扇
一扇うそのすゑ　ひてめうのあうかちめのうい
こまをあをゑ　ぬうう
一ちんちうつきの事　ちうひの扇のうをめうこ
うけうちん　ちうりうゑ　中ちうゑ　扇　て　言
うゑ
一扇の扇うき　きるあをゑみうちあうをうをうゑき

こまこまとかきとめうんあんをてうぬ
一きりの扇尾長の事
おすけ きすけちりなことちねうちはいるち
一扇乃長の事 あけハ ちりはてりハ 外りは
たるのさき
一つめ扇の事 うちつあけはめ とんすえ
うりうえ
一すゝ菜乃事 はちかゝくこのたりうんきこまこまこ
とこゝ山んよ会くまあ行よまちあく こ をち
うゝ角しやうんゆとうゝや ちすひやゝてりよ
一とゝ扇うりる 扇の事

ちかゝ扇のあんのちんやしきこまこまをそゝんよ
あとをくこゝちうゝ角
一はるけの事 ひちれ扇をこ一ちうゝ角
一扇しのゝす 初てすぐちかゝこまこまを会やてく
ちまつゝてんねのくさをとりくい扇
一扇こその事 ひてかこのあてかちめのそい
こまこまとあとをて ぬうゝ
一めんとりつきの事 ちゝひの扇のうとかる扇こ
うけくちんとちりくゝ中とうく扇て言
うゝ角
一扇乃扇うき者るあとみうちあるをちゝ角き

菜こひらむ[illegible]を四文[illegible]をとりゆきて
祝申[illegible]あるもくさ[illegible]
一ゑとゝとうふ[illegible]七日二てゝ[illegible]
てこんちかう[illegible]
一たゝるの菜のゝあけひのさ祝うんさたん
してゆきし[illegible]ことれとゝ[illegible]
もとはりあるもくさ[illegible]
とる水をてはなく[illegible]
ゝゝとすりく[illegible]
一ちゝふの菜の事　[illegible]
ゆんちんこをとゝ[illegible]

ゆんさをくゝとてもの
一げんゝ菜の事　ゆゝ[illegible]かの大[illegible]御
とゝふんゝあるもくさ[illegible]
一たゝふさのさきとるふ[illegible]事
ゝすのをひの祝をゆんをゝすきくの祝と
日よりてこゝゝ[illegible]
一はゝふさの菜の事　ゆちのこめあるもく
ちるときてこゝりゆゝ[illegible]
ちやこゝく祝ゝ[illegible]
ハせんとあるんさきの日よ入くゝ[illegible]
るけくこくする祝ゆゝ[illegible]

ふきりをハちゆ二てうてゑてゑてゑ